

正岡子規著「松蘿玉液」岩波文庫、岩波書店 1994年2月16日朝刊を読む

1. 病やや間あり

病びりりりりやや間あり 杖にすがりて手のひらほどの小庭を徘徊す。日うららかに照らして鳥空を飛ぶ。コ心よきこといはん方なし。二、三本の小松は緑のびて凌りょううん雲の勢をあらはし一尺ばかりの薔薇ばらは蒼つぼみふくれて一点しゆしんの朱唇を見る。秋草はわづかに芽を出していまだ萩はぎとも桔梗ききょうとも知らぬに一もとの紫羅傘いちはつは已すでに一輪の白花を開く。雨後土いまだ乾かぬ処にささやかなる虫のうごめくはこれも命あればなるべし。

萩なでしこ桔梗も撫子ななど萌えにけり
一八いちはつの一輪白し春の暮れ

2. 上野の花

上野りりりりの花 いかんにあらん。春の日和を独りふすまの中に寝てあればただごおごおといふ音のみぞ聞ゆる。

寝て聞けば上野の花のさわぎかな

ある日やや心よきまま車たすに扶け載せられて上野を巡りけるに綺羅きらの群衆花かげの陰おにごとに満ちて鬼事に余念なくあるは鬼事を見てうつつなし。いかばかりかうれしからん、風船さへ浮き浮きとして飛びたがる今日この頃。

新阪や向ふに見ゆる花の雲
古宮ふるみやの桜咲くなり杉の奥
黒門すりばちやまも摺鉢山も桜かな

P5 ~ 6

3. 菓物

菓物りり ほど味の高く清きものはあらず。小児はこれを好み仙人もこれを喰ふとかや。青梅あおうめは酸強く口を絞れども塩少しばかりつけんには、味あじわい言ひがたし。うら若き女の人には隠れて眉まゆあつめたるもらうたげなり。杏あんずはからびて賤しく李いよは水多くしてあさはかなり。いちごは西洋いちごを善しとす。されど行脚の足くたびれて草鞋わらじの緒ゆるみたる頃いわお巖の角に腰打ち据ゑて汗あせを拭ふ手の下に端なく見つけて取り食ひたる、味は問はず時に取りていと嬉し、出羽の山中に思はず日を暮らしたるもこれがためなり。神戸に病みし時物一つ咽のどを通らず乳さへ飲み得ぬに、わがためにとて碧虚二子の朝な朝な諏訪山の露を分けて一籠の赤き玉をもたらしたるこれに一日の腹をこやしたるもわりなしや。枇杷びわはうまけれど種子たね大きく肉少なきこそ飽かぬ心地はすれ。桑の実むさぼはなべての人に知られねども菓物の中これを外にして甘き者はなし。昼餉ひるげさへしたためずむさぼに貪りたる木曾の旅の思

ひいでられてなつかし。夏^{だいたい} 橙、ザボンの類ひ俗を離れて涼し。さして善しとにはあらねど少し病みて飯得たうべぬ折などまたなきものとぞ覚ゆる。梨は涼しくいさぎよし。南窓に風を入れて柱に倚り襟を披き片手に団扇^{うちわ}を持ちながら一片^{ひときれ}を口にしたる氷にもまさりてすがすがしうこそ。川崎八幡^{など}杯を通りかかりて時ならぬ頃茶屋の店先に見つけたる殊にうまし。林檎^{りんご}は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えてすずやかなる風ばかり口の中に残りたる仙人の薬にも似たらんか。桃には種類多し。善きもあり悪きもあり。王母後園^{おうぼこうえん}の風味は知らねど総て桃は世にへつらはぬ処に一段高き処あり。甜瓜^{まくわうりすいか}西瓜ひなびたれど誠^{まこと}あり。捨てがたし。殊に西瓜の色はうきたるふしもまじりながらなほ出女の恋したらんが如く君傾城の偽り多きには似もつかず。葡萄^{ぶどう}は甘からず渋からず人に媚びずさりとして世に負かず君子^{くんし}の風あり。栗は賤^{いや}し。甘藷^{かんしょ}とくらべられたるも口惜し。柿は野気多く冷かなる腸^{はらわた}を持ちながら味はいと濃^{こまやか}なり。多情の人、世を厭^{いと}ひて野に隠れながらなほ物に触れて熱血^{ねつち}を迸^{ほとばし}らすにもたとへんか。冷腸熱血われ最もこの物を愛す。柚子^{ゆず}は気高けれど食ふべからず。石榴無花果^{ざくろいちじく}のわれから裂けたるは喰ひ劣りぞする。蜜柑^{みかん}は浮気にして誰にも好かれ俗世の儀式などにも用ゐらるやや厭ふべし。われこの夏頃よりわけて菓物^{くだもの}を貪り物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦めばまたこれを食ふ。食へば則ち心すずしく気勇^{いき}む。気勇めば則ち想湧^わき筆飛ぶ。われ力を菓物^{くだもの}に借ること多し。

日毎^{ひごと} 十顆^かの梨を喰ひけり

小刀や鉛筆を削り梨を剥^むぐ

朱^{しゆすずり} 硯に葡萄^{ぶどう}のからの散乱す

書に倦^うみて燈下に柿を剥^むぐ半夜

柿くふて洪水の詩を草しけり

やがて新しき病をも得つ。まして時は冬に入りて木の実などあるべくもなし。わが筆少しも動かず。

(十二月二十八日)

P103 から 105

[コメント]

正岡子規晩年の四大随筆の第一作目、明治 29 年、29 歳の時の作品。岩波文庫で約 100 ページの小さな本だが、凝縮された文章は式の伝えたいことが痛いほどよくわかる。

- 2010 年 1 月 2 日 林明夫記 -